

「大石天狗堂」を訪ねて

前田俊行さんに聞く

(株式会社大石天狗堂社長、一九六三年同志社高等学校卒業・大学法学部入学)



ききて

吉海直人

(女子大学文学部教授)

二百年の伝統を今に伝える

吉海 店先に大きな天狗の面が掛かっていたのが印象的ですが、かるた屋さんなのになぜ天狗の面がシンボルになっているかを最初にお聞かせください。

前田 寛政の改革(一七八七〜九三年)以降生まれたとされる花札は、明治十八年まで、何度となく禁令が出ていまして、自由に販売ができず、当時私どもの店では表向きは米問屋、裏で花札を扱っておりました。今でも花札には「へみ湊屋」という

米問屋時代の屋号が入っています。父から聞いているのは、お客さんが自分の鼻を手でこすって「今日は、これあるか」とおっしゃると、店の奥まで案内し、花札をふるしきに包んでお持ち帰りになったそうです。その鼻をこする所作が強調されて天狗の面がシンボルになったらしいのですが、言い伝えだけで、文書が残っているわけではなく、眉つばかもしれません。

吉海 天狗の面というのは隠語というか当時の商売の象徴だったわけですね。創業はいつ頃なのでしょうか。

前田 寛政十二(一八〇〇)年には大石天狗堂があったと古文書に記されているだけで、創業がいつなのかは曖昧です。当時

は花かるたとも言われる花札を中心に扱っておりまして、禁制の中でもよく売れたと聞いております。

吉海 少なくとも創業以来二百年を過ぎているという事ですね。
前田 私たちの店は伝統工芸の店と言われるのですが、既存の商品だけではだんだん寂れてしまうという危機感が常にありま



して、一度絶えたかるたを復刻したり、新しいかるたを作りたいいつも考えています。創業二百年という節目もあり、去年京都で生れた「京いろはかるた」を復刻することができました。「犬も歩けば棒に当たる」で有名な「江戸いろはかるた」より以前に存在していた「京いろはかるた」は京都の誇りですので、

絵描きさんに絵を描き起こしていただくなど、手間ひまかけて再現いたしました。

吉海 この場所ですと商売なされていたのでしょうか。

前田 創業当時は、五条河原町で商売していたという資料が残っています。当時の五条通りは道幅が狭く、問屋さんや家庭用品を扱う商店をはじめ、米屋さん多数軒を連ねる賑やかな所だったようです。

吉海 大石さん以外のかかるた屋さんも多く集まっていたのでしょうか。

前田 テレビゲームメー



前田俊行さん

カーとして有名な任天堂さんをはじめ、数軒のかるた屋さんがあったと聞いています。

吉海 商売敵が集まっていたわけですね。

前田 今日の西陣織と同じですね。かるたの製造も各工程ごとに独立した職人がいたので、そうした職人が集まっている場所に、かるた屋も集まった方が仕事がスムーズにいったということでしょう。

吉海 なるほど。具体的にはどのような職人がいらつしやったのでしょうか。

前田 例えば、表紙を印刷する「表刷り」や規格の大きさに切る「裁ち屋」と言われる職人がいました。裏紙を折り返して貼る（裏貼り）ことでかるたの縁を整える「縁屋」も何百軒もありましたが、これは主婦たちの内職だったようです。そこに

かるたを持つていき、でき上がったものを引き揚げてくるという仕事もありました。

吉海 かるた屋はいくつかあるけれど、作る過程では、同じ人たちが携わっていたということです。

前田 かるた屋は最後の仕上げだけで、問屋のようなものでした。それが職人制度がだんだん崩れていき、職人たちが安定した収入が得られないこともあって、かるた屋で給料をもらって製造するようになっていきました。

吉海 一年のうちで、売り上げに波があつたのでしょうか。

前田 やはりお盆やお正月がよく売れる時期で、これが終わると売り上げは下がります。ただ閑散期も急な注文に応えられるように在庫を用意しておかないといけませんし、職人の技術向上のために少量ずつ作り続けていたようです。これは現在でも同じで、裏貼りなどしつかりとした技術がないと良いものではないので、熟練の職人を時間をかけて育てています。

吉海 デパートなどで百人一首作りの実演を見ますが、一枚一枚手で貼っていくのは大変な作業ですね。

前田 一組を丁寧に作り上げるのに一人三〜四時間ほど掛かり、一日にできる量が限られているので、どうしても値段が高くなってしまうことを、そうした実演を見ていただくとお分かりいただけると思います。

多難な歴史をくぐり抜けて

吉海 以前花札には、相当税金がかけられていたという話を聞

いたことがあります。

前田 明治十八年に、明治になって輸入されたトランプは自由に販売できて、花札が販売できないのはおかしいという話になり、花札の販売が解禁になりました。ところが、伊藤博文総理大臣が米国を訪問した際、トランプに税金を掛けて税収を得ているのを知り、明治三十五年、骨牌税が施行され、花札に税金が課せられるようになってしまいました。一組当り税額二十銭が掛かるようになり、例えば普通品二十銭のものが、倍の四十銭の売値になるべらぼうな税金が掛けられました。まず、収入印紙を郵便局へ買いに行き、一品一品に貼らなくてはならなかったんです。業者泣かせの税額でしたので、かなりの業者がその時に姿を消しました。

吉海 戦費調達のために、税収増加の方法を求めていた政府にとっては、渡りに船だったわけですね。

前田 国内販売は、税金が非常に高いのでしんどい。当時、中国や朝鮮半島に移民として行った人が多かったので、かるた屋も一緒に進出しました。輸出する花札には税金が掛からず、紙が調達しやすかったのも輸出増加の要因です。父も商売のため一年のうちの半分くらい中国に行っていたそうです。それで、中国や朝鮮半島で花札がかなり流行したらしいですね。

吉海 韓国には、現在でも花札が残っているという話を聞いたことがあります。

前田 私も二十年ほど前、商談で韓国に行く際、お土産に百人一首と花札を持っていたのです。そうすると、税関で止められ、「花札はよく知っているから通してもいいが、これ（百人

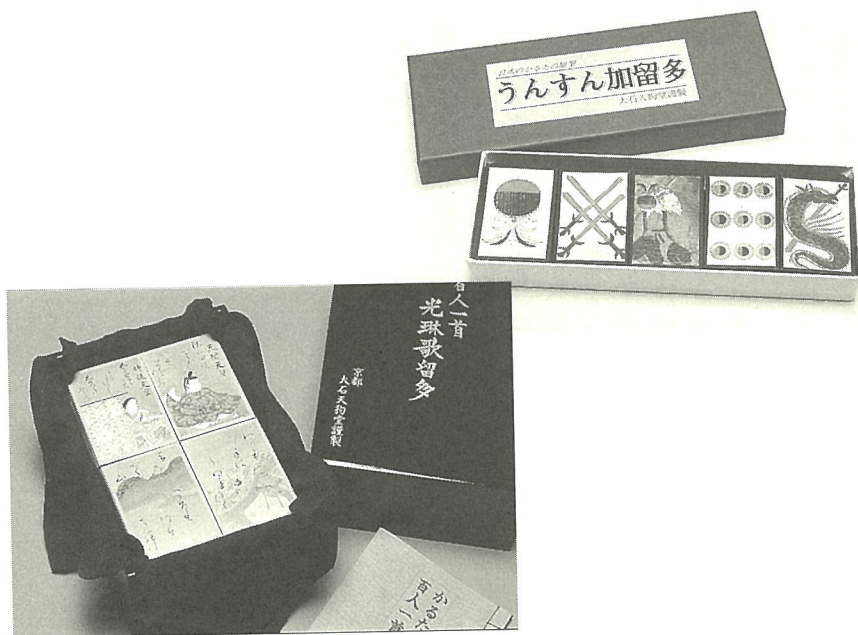
一首）は見たことがないから、預かっておいて帰る時にまた返す」と。百人一首を韓国で作りたいと思っていたので、税関で止められたらどうしようもない（笑）。そこで、年配の税関の人を呼んでもらうと百人一首をよくご存知で、無事に通過できた経験があります。花札の方はよく知られていて、韓国製のものはプラスチックでできていましたね。

吉海 韓国にかかるたメーカーがあるのですか。

前田 韓国のマークも付いていて、れっきとした韓国製の花かるたでした。ただ、「小野道風に蛙」の小野道風をよく見ると、韓国のひさしの長い帽子「カツ」をかぶっているんです。それだけがちよつと違いましたね。人によつては、花札は韓国が本場だと思っている人もいますが、天狗堂が輸出用に「光」という文字を入れたものがそのまま残っており、かなり純粋な形で



吉海直人さん



日本のかるた文化が伝承されています。

吉海 韓国では、花札を何と呼んでいるのでしょうか。

前田 「花闘」という字が書かれていました。遊び方はまったく同じです。

吉海 ところで日本の花札には「大統領」や「將軍」などの名称がよくありますね。

前田 以前私どもは、天狗のマークを付けた金天狗・銀天狗・並天狗などを発売していました。一九〇〇年頃に任天堂さんが、「大統領」という商標で発売され、花札遊びの掛け声の「大統領！」という言葉とマッチして非常によく売れたのですが、それに対抗し田村將軍堂は「大將軍」、日本骨牌は「大隊長」、松井天狗堂は「女王」（えりざべす）とか類似的の名称で発売しています。任天堂はその後、「天狗」まで使用したので、私どもも向こうをはってリンカーン大統領の絵で売り出したのです（笑）。それで商標闘争が起りまして、最終的に最高裁まで争った後、和解したんですけれども。商標がたくさんある中で、大統領、將軍、天狗などが人気を集めました。

吉海 花札の商標登録はあまりされていなかったのでしょうか。

前田 他社が真似をすると、新しい商標を作ったまま売り出すのが一般的で、登録まで至るケースは少なかったと思います。私どもの商標は、店の看板になっている赤天狗です。

吉海 他にもいろいろ作っていたそうですね。

前田 株札、それに「越後花」など、絵や大きさ、色等が違う四十種類もの地方札のうち、かなりの種類を作っていました。

花札は、昭和三十〜四十年頃までかなり作っていましたけれど、その当時から見ると花札をする人が激減し、現在は、経営が成り立たないほど、生産量が減っています。

吉海 地方札も京都で作って発送していたのでしょうか。

前田 そうです。いわゆる「京物」はいいんだというイメージがあつたのだらうと思います。

吉海 私は長崎県出身ですが、子供の頃の花札はみんな同じで、地方札にはお目にかかれなかつたような気がします。

前田 地方札は、主に賭博に使われていました。生産数も花札と比べて十数分の一くらいしか作られていなかったようなので、家庭には入っていかなかったのでしょうか。

吉海 花札で遊ぶ時、よく札を座布団に投げてパンと音を立てていましたね。

前田 どうしてもゲームをしていると力が入りますよね。願掛けのように札を思いっきり投げつけると、いい音がでてピタッと止まるんですね。その花札を作るためにいつも反りと重さに気を使っています。

吉海 私が小学生の頃は、たいていの子供が花札で遊びましたが、現在の我家の子供たちはというと遊ばないですね。

前田 今ではどれだけの方が家庭で遊んでおられるか……。売っている場所も非常に少なくなりましたね。以前は雑貨屋、おもちゃ屋、それからたばこ屋。たばこ屋ではたばこケースの横に花札を入れて売っておられました。最近では花札を売っている所が極端に減りました。対策として私どもでは、一〜二年前から通信販売も行っています。

時代とともに変容するかるた文化

吉海 先程韓国の花札が少し違っていたとおっしゃいましたが、日本の花札も地方札を含めて、バリエーションがあると思います。大石さんの所にもサイズの違うものを置いてらっしゃる。

前田 私どもの店には、今のかるたの倍程の大きさで、美しい絵が描かれた花札が一つ残っています。これは、京都によくいらつしやつた伊藤博文公から、私どもにご注文いただいた特製品です。当時、木版刷りで作っていましたが、すり減つて潰れてくるのか、絵柄が抽象化されてきました。だからこの特製品には美しい絵を残すという目的もあつたのでしょうか。ガラスを使つたおしゃれなケースに入っている記念品仕様になっています。

吉海 現在の花札の図柄と比べて、異なっている点がありますか。

前田 “小野道風に蛙”の絵柄が、以前は歌舞伎『假名手本忠臣蔵』に登場する盗賊斧定九郎が雷雨の中、傘をすぼめて走る姿でした。また、今「坊主」と言われている札は、本来すすきが茂っている風景なのですが、すすきの線が潰れて山のようになっています。

吉海 よく見ると言葉も書かれていますね。

前田 たしか『新古今集』にある藤原家隆の歌なのですが、今では潰れて読みづらいですね。遊ぶ時には関係ありませんが、

当時は何か意味があつたかもしれません。

吉海 百人一首に近い形を持っているのでしょうか。

前田 そうですね。地方札である越後花には、はっきりと歌が入っているのがわかります。

吉海 花札が四十八枚なのは、何か由来があるのでしょうか。

前田 ポルトガル船に積まれて日本に入ってきた四十八枚の「南蛮かるた」が花札の原形だと考えています。その後、七十五枚の「うんすんかるた」など日本人が工夫してさまざまな枚数と形になっています。最終的には、四季の十二カ月に区切つたものを各四枚ずつ、計四十八枚という形になったということです。

吉海 明治時代になって五十二枚（ジョーカーを除く）のトランプが英仏から入ってきますね。

前田 トランプと花札はまったく別物だと思います。花札は、日本人の手で作られた独特な形です。よく外国のカードを研究されている方も驚きますが、カードには絶対なくてはならないものがない。それは数字ですが、数字がなければまずゲームにならないはずなのに、花札は数字が記されていない、世界でも非常にめずらしいカードです。

吉海 日本の十二カ月ある四季に合わせるから分かりやすいのですね。今の子供たちは季節感覚に乏しいので、それが何月なのか分からないのではないのでしょうか。

前田 分からないでしょうね。現在は、食物にしても花木にしてもとんでもない季節に出回りますから、だんだん季節感覚が薄れているのでしょう。しかし、昔の人たちは、絵柄を見れば

瞬間的に分かった。古い遊び道具ですが、昔の人の感覚を伝える花札を何とか残したいと思っています。

吉海 大石さんでは花札以外にどのような商品を扱っていますか。

前田 明治の頃から百人一首も作りだし、手書きで作っていた時は、商売になりませんでした。印刷するようになってからは、軌道に乗るようになりました。子供向けのいろはかるた、日本に古くからあつた「貝合せ（貝覆い）」なども数年前から作っています。

吉海 先程いろはかるたには、京いろはかるたと江戸いろはかるたがあるとおっしゃいましたが、広まったのは江戸いろはかるたの方ですね。京都でも江戸いろはかるたで遊んでいたのでしょうか。

前田 明治時代以前では「京いろは」が主流で、その後、子供向けの雑誌等の付録に、「江戸いろは」が多く用いられたのが全国的に流行した要因ではなかったかと考えています。というのも、出版社は東京の方が圧倒的に多いですから。

吉海 最近では、江戸いろはかるたそのものが廃れてきて、例えば、テレビアニメ「ドラえもん」の人気キャラクターのかるたなどがありますね。

前田 私どもは、それを「キャラクターかるた」と呼んでいます。テレビや漫画でおなじみになったキャラクターをすべてかるたにしてしまう傾向は、今も昔も同じことですが、一年で消えてしまうかるたも非常に多い。そういう面では、江戸いろはかるたは息が長いですね。

吉海 いろはかるたにも地方それぞれの物がありますよね。

前田 私どももたくさん作っている「郷土かるた」は、各地方出身の偉人や誇れるものをかるたにして、地元の子供たちに覚えてもらうために配っていることが多いですね。

吉海 教育的な配慮があるのでしょうか。「上毛かるた」には、「へ 平和の使い新島襄」というのが確かあります。最近、京田辺近辺で「山城かるた」の作品募集があつて、私も少し色気があつて応募しましたが、と 同志社は簡城の丘にそびえたつ「が入選しました。

前田 それはすごい。百人一首も、中学・高校の古典の授業やかるた大会で使用する学校が増えてきましたので、需要は伸びています。

吉海 花札と比べて百人一首の方は、歌が書いてあることが生き残る一つの要因になっているのでしょうか。

前田 花札は、表の絵も大切ですが、ゲームでは裏がより大切です。いかに裏に傷がない札を作るかというのが業者に求められます。でないと、裏を向けているカードが何なのか分かってしまいます。逆に、百人一首は歌と絵が書かれた表側が大切なのです。

吉海 競技用の百人一首は、普通の百人一首と比べて違いはありますか。

前田 もし読み札の表側が見えてしまつても競技中に支障をきたす事がないように、読み札には色を入れていません。また、競技中は激しく使われますので、丈夫に作ることを優先しています。

吉海 テレビで百人一首の競技を見ていると、見事に札が飛びますね。

前田 札の厚さと大きさを各かるた会が決めています。後は反りですね。全部裏側に反つて少し浮くように作っています。業者間では、「四つ足で立つように」と言いますが、表と裏に貼つた和紙の引き合いが絶妙のバランスで、四隅だけが地に着いているのが理想の形です。

吉海 すべての札が同じように反るのは、難しいのではないで



右：前田美由紀さん（'98年女子大学学芸学部卒業）

「大石天狗堂」

京都市伏見区両替町2丁目352-2
<http://ww2.wt.tiki.ne.jp/~tengudo/>

しょうか。

前田 作業をする環境とのりの濃さ、塗る量等々を同じにしなければなりません。

吉海 その上、かなり大量生産をしていくということですよね。

前田 百人一首は、値段の幅が非常にありまして、よく普及しているもので千五百円。まず遊んでもらい、なじんでいただく事が目的です。中級品は、和紙を使って、裏貼りをしています。高級品としては、数十万円する鑑賞を目的としたかるたまで作っています。

吉海 美術品に近くなるわけですね。例えばどのような品がありますか。

前田 元禄時代の画家、尾形光琳が描いた百人一首が京都で発見されまして、それを忠実に再現したものを作っています。これは、本金を使用していますので、二十八万円もするものがあります。最近では、百万円を超える純金の百人一首も出しています。

吉海 金に印刷するのですか。

前田 そうです。金に色を印刷する技術が開発され、金に糊を付けられます。金の屏風などにかつての絵書きは絵を描いていましたし、それと同じやり方で、昔の手作りに近いものを出すと喜んでいただけます。

かるた文化を日本から世界に

吉海 お話を伺っていると、かるたの世界はずいぶん広いこと

が分かりました。その中で百人一首だけがポピュラーになっている気がします。もちろん最近では正月にかるた取りを行う家庭も少なくなっているようですが、百人一首さえ安泰といえませんか。

前田 百人一首は日本の伝統的な遊びですから、残っていくと思います。世界の方々にもつと知っていただきたいと思い、英語版のかるたを作りました。それで子供たちに評判を聞きまして、文字を英語にするだけではだめだと笑。漫画的な絵の方が世界の人に分かりやすいという声がありまして、今年漫画風にアレンジした百人一首を外国向けに作りました。ODA（政府の途上国援助）を通じてさまざまな国に配っておりますので、面白い反応が返ってくるのではないかと期待しております。

吉海 美しい花札も残していてもいいですね。

前田 私どもは、ゲームとしての花札を残したいと思っています。ですが、外国の方は、デザインがすばらしいと評価してくれます。また、源氏物語の中の代表的な歌を取り上げたかるたを復元しましたので、世界中の人に、もつと知っていただけたとありがたいです。これから、かるた文化の帰趨はいかに世界の人に見ていただくかという事にあると考えています。

吉海 世界からの反応で、日本人もまたかるたの良さを見直すということでしょうね。大石さんがこれからも日本の古くて新しいかるた文化を世界に発信していけることを願っております。本日は貴重なお話をありがとうございました。